

# 森の自由人 126

狸泥舟

## 広葉樹の行き先

北海道大学雨龍研究林での合宿を終え、森林施業研究会の最終日は、旭川市にある旭川林産協同組合を見学した。この貯木場では、7、8月を除く毎月銘木市が行われている。銘木とは、優れた材質で希少価値のある木材のこと、主に天然林材である。かつては全国どこにでもあって、銘木市は各地で行われていたのだが、奥地天然林の伐採が進んで、今では細々と行われている状態にある。少なくなったとはいっても毎月行われているのだから、さすがに北海道である。



写真 1 銘木市で落札されたヤチダモの丸太



写真 2 シラカバのテーブル

次に行ったのは、旭川市の隣町の東川町にある「北の住まい設計社」。廃校になった小学校を工房にして、道産の無垢材を使い、手仕事で家具など木製品を作っている。

代表の渡邊恭延さんがとつとつと語ってくれた。自然、人にやさしいというのが、この会社のコンセプトであろう。家具作りからはじまって、住宅建築にまで及んで、住まいの一貫性を追求している。家具を扱う職人たちから、庭で楽しむ女性たちをみても、この会社が地域に溶け込んでいるのがわかる。

シラカバの製品開発にも一役かっていて、今まで日の目を見なかった樹種がどんどん利用されるようになってくれれば、造林費用を軽減した低コスト育成林業が可能になる。

ここで森林施業研究会は終了解散となった。

## 厚岸ウィスキー

しかし、私の北海道滞在にはまだ続きがある。研究会とともに参加した菅野知之さんと車で、美瑛、富良野と北海道の中央部を南下した。菅野さんは、北海道広尾町周辺で378ha、静岡県天竜で65haの森林を経営する史春森林財団の代表理事である。実は彼は林野庁OB

で、新規採用のとき私が係長だったという昔馴染みなのだ。そこで今回の森林施業研究会の合宿で北海道を訪れるのを機会に、財団の森林経営も拝見させてもらうことにしたのだ。

旭川から広尾まではほぼ真っ直ぐに南下する。途中美瑛では四季彩の丘をちょっと見。観光客のほとんどが中国人で、いかにも彼ら好みの美観だった。



写真 3 四季彩の丘

十勝岳連峰を借景とする雄大な構図の中に、突然現れたカラフル極まりない外来種の花畠の評価は高いのだろうが、私の偏光眼鏡にはピンボケに映る。中央下方を横断する道では、結婚イベントだろうか、純白のウェディングドレスの花嫁が見える。密閉された式場でなく、広大な大地の一角、開放的で彩り豊かな花々に囲まれての挙式は素晴らしいものだ。

昨年の森林施業研究会の合宿で訪れた東大演習林のある富良野、南富良野を通過して、道東自動車道に乗って帯広に向かう。菅野氏が興味深い話をしてくれた。道東自動車道の盛土法面もりどのはんにカラマツの種子が飛んできて発芽・成長していて、すでに数メートルの樹高になっている。それが帯広に近づくにしたがって樹高が低くなっていくそうだ。すなわち竣工順に樹高が高いのだ。まあ当然のことながら、こうした観察眼がフォレスターの必須要件であろう。森林の中だけでなく、何気ない生活の中で自然の営みを受容できる感性を鍛えたいものである。

この日は帯広に泊まり、屋台町にくりだした。広尾出身のマスターの店に行き、そこに何種類か利き酒セットがあった。下戸の私としては、余り量を過ぎさないで済む利き酒セットはありがたい。菅野氏は、「厚岸ウイスキー」があると言い出して、これを注文することにした。いくつかあるシングルモルト、ブレンドの中から4種を選ぶことができる。4つ並んだ小さいグラスの1つを取って口に含んだ途端、ぱあっと華やかなフレーバーが広がった。初めて聞く名のウイスキーだし、酒の値打ちなどとんと知らぬ私にも、これは旨いとわかつた。厚岸町は釧路より東にあり、周囲に広がる湿原由来のピートが醸し出す、香りなのだろうか。

注文してから気づいたが、このセット4,000円もするのだ。屋台にしては高すぎるだろうと思ったが、厚岸ウイスキーはふつうに1本25,000円はするらしく、それでも手に入れにくいのだそうだ。



写真 4 八角一夜干し

北海道ならではの魚八角<sup>ハツカク</sup>の一夜干しを味わいながら、常連さんたちとの話もはずみ、狭いながらも面白い店だった。菅野氏におごってもらって悪かった。

### 史春森林財団の森林経営

翌日広尾へ向かう。かつては帯広から広尾までの 84km を国鉄広尾線が走っていて、特に愛國駅から幸福駅までが人気だったが、国鉄民営化直前の昭和 62 年 2 月に廃止された。ちなみに国有林でいうと沿線にあった広尾と大樹<sup>たいき</sup>の 2 つの営林署も廃止されてしまった。こんなこと、思い出す人いないな。

広尾町の手前の大樹町で太平洋岸に出て、生花苗沼（おいかまない）の背後にある生花の森を案内してもらった。史春森林財団については、以下のホームページを見ていただきたい。

<https://www.fumiharu.org/>

私は、現役時代の大半を国有林で過ごして、林業とは企業経営に乗らないものだと痛感した。その主因は、木材価格の低迷にあることは論を待たないが、大規模経営に起因する恒常的な支出を不安定な収入で賄えないことがある。つまり木材価格が低下すると収入減を埋めるために増伐を余儀なくされ、森林資源（資本）を先食い（取り崩し）しなければならないことになる。

ところがここ史春森林財団では、ほとんど国有林と同じコンセプトを持ちながら、伐採、造林、エコツアーなどの事業を通じて、豊かな生態系の再生と地域経済の活性化に寄与し、しかも健全な財務を維持している。私の好まない齢級配置の平準化までしようとしている。



写真 5 生花の森 皆伐・造林地

国有林と当財団の決定的な差は、人件費にあるのだ。常勤の従業員を抱えてしまうと、途端に経営に行き詰ることになる。

写真 5 が生花の森の皆伐・造林地で、アカエゾマツやトドマツが植栽されている。かつての放牧地が森林化した箇所で、この平坦さ命であろう。40 年生程度のカラマツやトドマツの人工林と 70 年生ぐらいの天然生広葉樹林を伐採しているが、このような一般材で利益を出すには、伐採・搬出費をかなり安く抑えないといけない。内地の急峻地ではとてもできない芸当である。林業で利益を上げるには、立地の良さを生かすことが何より肝要である。

たぶん、写真 5 の植林地は今後シラカバが大量に侵入してくるであろうから、下刈、除伐の段階で植栽木と侵入木をどのように共存させていくかに悩むことになるだろう。写真 6 は、この周辺の牧野の中の空き地に天然更新して広葉樹林化した箇所であるが、森林からか



写真 6 牧野の中の天然更新地

るのが、フォレスターの冥利というものだ。

なり離れた場所でも、この有様である。まして森林のど真ん中の皆伐地では天然更新が優越するはずである。

別の箇所では、カラマツやトドマツの天然更新木が旺盛な成長を示しているところもあって、それぞれに楽しみが多い。それらはおそらく微地形や前生樹の違いなど微妙な条件の違いによるもので、それらをうまく活かしていくけば、多様な樹種で構成された活力ある森林が、低コストで育成できるだろう。その方法を探